

★九級

浦ノ内  
○よしおかまひろ

★十級

吾桑 山本ゆきの

★新規

十級編入  
ふたば 後藤和葉

令和五年七月号からの規定課題

(唐庚「醉眠」)

山 静 似 太 古  
 日 長 如 小 年  
 餘 花 猶 可 醉  
 好 鳥 不 妨 眠  
 世 味 門 常 掩  
 時 光 簞 已 便  
 夢 中 頻 得 句  
 拈 筆 又 忘 筌

山 静 かに して 太 古 に 似 たり  
 日 長 く して 小 年 の 如 し  
 余 花 猶 お 酔 う べ く  
 好 鳥 眠 り を 妨 げ ず  
 世 味 門 常 に 掩 い  
 時 光 簞 已 に 便 な り  
 夢 中 頻 り に 句 を 得 た る も  
 筆 を 拈 れ ば 又 筌 を 忘 る

「大意」

山中に住んでいると、静かであるで大昔の世界に思ってしまう。

日は長く、一日が一年のように感じられる

春の名残の花がまだ咲いており、酔っぱらうにはぴったりだ。

かわい鳥のさえずりは、うたを寝の邪魔にはならない。

俗世間のことには興味がなく、出かけていくことも客が来ることもないので門はすくと閉まっている。

時節には少し早いですが、もう夏用の竹の敷きこゝろを使っています。

夢の中では少しなんと句が浮かんだのに、

起きて筆をとると、もう忘れてしまっていた。